

■ 解答・解説

問1 (答え) (流れが) 絶えることがなくて。

「絶え」は「絶ゆ」(とぎれる・なくなる)の意味で、川の水がとぎれることなくずっと流れ続けている様子を表します。「~ずして」で「~ないで・~なくて」と訳します。

問2 (答え) 打消の助動詞「ず」の連用形。

「絶えずして」は「絶え(ヤ行下二段動詞「絶ゆ」の未然形) + ず(打消の助動詞・連用形) + して(接続助詞)」と分けられます。「~ないで/~ずに」と訳し、「絶えることなく(ずっと続いて)」という意味になります。

問3 (答え) もとの(同じ)水ではない。

川は流れ続けて絶えることがないのに、そこを流れる水は次々と入れかわり、もとの水のままではない、という意味です。「あら」はラ変動詞「あり」の未然形、「ず」は打消の助動詞で、「~ではない」と訳します。

問4 (答え) 「あら」=ラ変動詞「あり」の未然形/「ず」=打消の助動詞「ず」の終止形。

「あらず」で「~ない・~ではない」という打消の意味を表します。直前の「もとの水に」の「に」は断定を表す部分で、全体で「もとの水ではない」となります。

問5 (答え) 断定の助動詞「なり」の連用形。

「もとの水に+あら+ず」で「もとの水で+は+ない」という意味になります。この「に」は「~である」と言い切る断定の助動詞「なり」の連用形で、すぐ下の「あり(あら)」とむすびついて使われています。

問6 (答え) 川などの水の流れがとどこおって、ゆるやかになっている所(流れがよどんでたまっている所)。

「よどみ」は、水がよどんで(流れがにぶって)たまっている場所のことです。そこに泡(うたかた)が浮かんでいる、という情景です。

問7 (答え) 水面に浮かぶ水の泡(あわ)のこと。

「うたかた」は、できてはすぐ消えていく、はかないものたとしてよく使われる語です。

問8 (答え) 消えてはまたでき、長くとどまることのない泡は、はかなく移り変わっていくもの(人の世・人の命や住まいの無常)のたとして用いられている。

「ゆく河の流れ」も「うたかた」も、絶えず移り変わって同じ状態にとどまらないものの象徴です。

問9 (答え) (泡は) 一方では消え、一方ではでき(結び)て。

「かつ……かつ……」は「一方では……、また一方では……」と、二つのことが同時に起こるさまを表します。「結び」は「(泡が) でき上がる・形をつくる」の意味です。

問10 (答え) 終止形=結ぶ/活用の種類=バ行四段(活用)。

「結び」は「結ぶ」の連用形です。ここでは「(泡が) でき上がる」という意味で使われています。

問11 (答え) (一つの場所に) 長くとどまっている例(ためし)はない。

「久しく」=長く・ずっと、「とどまる」=そのまま居続ける、「ためし」=例・先例、「なし」=ない。泡

が一つも長くとどまらないように、すべてははかなく消えていく、という無常を述べています。

---

**問12 (答え) 例 (ためし)・先例。**

「ためし」は「以前にもあった例・前例」という意味の名詞です。「ためしなし」で「(そのような) 例はない」となります。

---

**問13 (答え) 世の中に生きている人と、その住まいとも、またこれ (川の水や泡) と同じようである。**

「ある人」＝(この世に) 生きている人、「栖 (すみか)」＝住まい・家、「かくのごとし」＝このようである、の意味です。人も住まいも、川の水や泡のように絶えず移り変わっていく、ということを表します。

---

**問14 (答え) 読み＝すみか／意味＝住まい・家・すみか。**

「栖」は人が住む場所 (家・すみか) のことです。ここでは、人が住む家もまた移り変わっていくものとして取り上げられています。

---

**問15 (答え) 比況 (ひきょう) の助動詞「ごとし」。意味は「~のようだ・~と同じだ」。**

「かくのごとし」で「このようである・これと同じだ」となり、人と栖が、すぐ前に述べた川の水や泡と「同じようだ」ということを表します。

---

**問16 (答え) 「ゆく河の流れ」や「うたかた (泡)」は、世の中に生きる人と、その住まい (栖) にたとえられている。**

絶えず流れる川の水や、できては消える泡のように、人もその住まいも移り変わり、いつまでも同じ姿でとどまることはない、という対応になっています。

---

**問17 (答え) 「かくのごとし」＝「このようである」の意味で、直前の「川の流れ・水・うたかた (泡) が絶えず移り変わり、同じ状態にとどまらない」ありさまを指す。**

(説明) この世に生きる人と、その人が住む家 (栖＝すみか) もまた、川の水や泡と同じように、絶えず移り変わり、いつまでも変わらずに在り続けることはない、ということ。自然の様子 (川・泡) にたとえて、人間の世のはかなさ・無常を述べています。

---

**問18 (答え) 無常観 (むじょうかん)。**

この世のすべてのものは移り変わり、永遠にとどまるものはないという、仏教にもとづく考え方です。方丈記の冒頭は、この無常観を川の流れと水の泡にたとえて表した名文として知られています。

---

**問19 (答え) (ア) 作者＝鴨長明 (かものちょうめい) / (イ) ジャンル＝随筆 / (ウ) 成立した時代＝鎌倉時代 (鎌倉時代初期)。**

『方丈記』は、清少納言『枕草子』・兼好法師『徒然草』とともに「日本三大随筆」の一つに数えられます。あわせて覚えておきましょう。

---

**問20 (答え) 『枕草子』＝作者清少納言 (せいしょうなごん) / 『徒然草』＝作者兼好法師 (けんこうほうし)。吉田兼好)。**

『方丈記』(鴨長明) とあわせて「日本三大随筆」と呼びます。「枕草子＝清少納言」「徒然草＝兼好法師」「方丈記＝鴨長明」をセットで覚えましょう。

---